

住宅を開き合う自治組織の活動 実態とその効果に関する研究 —グループ・スコアを対象にして—

A STUDY ON THE ACTUAL ACTIVITIES AND EFFECTIVENESS OF AN AUTONOMOUS ORGANIZATION THAT OPEN HOUSES

— For group schole —

奥野湧太 — * 1 山口陽登 — * 2
徳尾野 徹 — * 3 西野雄一郎 — * 4

Yuta OKUNO — * 1 Akito YAMAGUCHI — * 2
Tetsu TOKUONO — * 3 Yuichiro NISHINO — * 4

キーワード：
自治組織, 住宅を開き合う, 相互扶助

Keywords:
Autonomous organization, Open houses, Mutual aid

This paper reports on the actual operation and use of the Group Schole, which is active mainly in Senboku New Town. It also aims to examine the meaning of the activities, focusing on changes in residential awareness as a result of the activities. This study presents 1) Key points in the operation of an autonomous organization, and 2) The effects and possibilities of the activities to open houses to each other as an autonomous organization.

1. はじめに

1.1 研究背景・目的

住宅は近代以前、冠婚葬祭などの行事が行われ、地縁コミュニティに開かれた場としても利用されていた。しかし、近代以降はプライベート空間の性質が強く閉鎖的な空間となっていくことにより、コミュニティの希薄化が問題になった。これに対して、趣味を通じて他者を自宅に招き合い住宅内で交流する稀有な組織が確認されている。泉北ニュータウンを中心に活動するグループ・スコアは、組織として複数人が住宅を開き合い、趣味を互いに教え合いながら共に楽しむ講座活動を行っている自治組織で、地縁や血縁型とは異なる独自のコミュニティが築かれている。講座活動はコロナの影響による大阪府下での緊急事態宣言発令時期を除いて継続して行われ、今年で26年を迎える。このような行政に頼らない自治活動は私有空間を利用したコミュニティの形成や場づくりの手法、それらの活動の持続において新たな可能性を持つ。さらに、住宅を開き合う活動は、持続的な住空間の維持活動や空き家化の抑止などにも繋がり、空き家問題に対して、新たな知見をもたらす可能性がある。

このように私有空間である住宅を用いてコミュニティの場づくりを行う住み開き¹⁾の事例は、近年、全国各地で確認されているが、多くは一拠点かつ一時的な活動である。また、世田谷区の一般財団法人世田谷トラストまちづくり「地域共生のいえづくり支援事業」²⁾(以下「トラまち」)では、住宅を用いて地域の場づくりを行うために専門家派遣など行政による技術的支援が行われ、世田谷区内で複数拠点の展開と活動の継続がなされている。また、トラまちを対象に事業の運用³⁾や管理運営の実態⁴⁾、場を継続させる運営手法⁶⁾、場の特性⁵⁾など様々な視点から研究が進められている。しかし、公的組織による公共空間の整備や事業の推進及びしくみづくりは、多様化するニーズに対して柔軟かつ即時的に対応することが困難である。そのため、行政による活動を補完する意味でも自治組織による活動の展

開が求められる。

そこで、本研究は住宅を開き合う自治組織のグループ・スコアを対象に、組織開設や運営の実態と利用者の実態および組織活動の評価、さらに活動による住意識の変化を把握することを目的とする。組織の運営側・利用側それぞれの視点から組織の実態を把握することで組織活動のメカニズムを明らかにし、自治組織の運営における要点を考察する。なお、利用実態は自宅開放者と非開放者を比較して考察することで、自治組織として住宅を開き合う活動の可能性や運用時の基礎的知見を得る。

1.2 調査対象「グループ・スコア」の概要

調査対象の概要を表1に示す。グループ・スコアは1997年に発足した平均年齢68.2歳のシニア世代による組織である。主な活動である講座は60講座存在し、会員208名のうち30名が自宅を開放している。会員は、堺市南区を中心に大阪府下で広域的に分布しており、持家の戸建住宅が多い一方で分譲の集合住宅も一部みられる(図1)。

1.3 調査概要・研究方法

まず、組織開設から運営の実態を把握するため、組織独自の周年誌⁷⁾を用いた文献調査と開設者であり理事長であるT氏に対してヒ



図1 堺市南区周辺の会員分布図

表1 調査対象「グループ・スコア」の概要

発足時期	1997年7月	性別	男女比 約1:9 ^{*2}
会員	208名 ^{*1}	住宅形式	持家戸建: 55(21)戸 ^{*2 *3}
年齢	平均年齢 68.2歳 ^{*2}		分譲集合: 11(01)戸
講座	60講座 ^{*1}	住宅規模	賃貸集合: 02(00)戸
自宅開放	30名 ^{*1}		平均 144.7 m ² ^{*2}

*1 2022年8月時点 *2 アンケートの調査結果 *3 全体 N=68(自宅開放者 N=22)

*1 大阪府立大学大学院工学研究科 前期博士課程
(〒558-8790 大阪府大阪市住吉区杉本3丁目3番138号)

*2 大阪公立大学大学院工学研究科 講師・修士(工学)

*3 大阪公立大学大学院工学研究科 教授・博士(工学)

*4 大阪公立大学大学院工学研究科 講師・博士(工学)

*1 Graduate Student, Graduate School of Eng., Osaka City Univ.

*2 Lecturer, Graduate School of Eng., Osaka Metropolitan Univ., M.Eng.

*3 Prof., Graduate School of Eng., Osaka Metropolitan Univ., Dr.Eng.

*4 Lecturer, Graduate School of Eng., Osaka Metropolitan Univ., Dr.Eng.

アリング調査を行った。次に、利用実態と組織活動の評価、住宅への影響を把握するため、全会員を対象にアンケート調査（回収率：38.9%）を行った（表2）。これらの結果から、組織活動のメカニズムについて考察する。

2. 組織運営の特性

2.1 組織の開設経緯

理事長であるT氏は、自宅で行う学習塾を50歳でやめて以降、しなければいけないことが何もない状況に生きがいを失った。そんな中、運営の主要メンバーであるY氏を含む友人たちを家に招いて料理を振舞っていた時の雑談から、自宅に招き合い趣味を共に楽しむ活動を組織化するアイデアが生まれ、グループ・スコアレが発足した（表3(a)）。老後生活の中で自宅に招き合いお茶を飲みながら世間話を行い、趣味を楽しむ活動の継続を図るために組織化に至ったことがわかる。

2.2 組織開設から運営における思い

理事長T氏は、お金が絡まないボランティアへの興味と生活におけるコミュニケーションの重要性に意識があり、開設当初から行政に頼らず、互いに助け合う生活を意識した。また、本音の言い合える平等な関係性を築くことを目指して組織運営に取り組んだ（表3(b)）。

2.3 運営体制

運営体制は、理事長と数人の役員が集まる役員会で組織運営に関する様々なことが議論され、講座の開講者が集まるリーダー会での議論を経て実施される。リーダー会では、役員会で検討された議論の決定がなされる他、組織内イベントの報告、収益及び還元金額など毎月の組織活動に関する様々なことが共有される。なお、この体制は発足当初から変わらずに継続して行われている（図2）。

2.4 講座活動

講座は、開講者の自宅に参加者が集まり次第開講され、講座後にはお茶をして自由に雑談や世間話をする時間（以下「お茶タイム」）が設けられている（図3）。なお、参加時にはお茶代として500円を開講者に支払い、講座開始からお茶タイム、解散までの準備や片付けは参加者全員で行う。また、複数講座があるためメンバー間で互いに教え合う関係になっている。自宅開放の流れは、組織入会時に趣味趣向などの基礎情報を記入するアンケートと講座参加中のふるまいを観察し、講座の開講ができそうな人に理事長のT氏が声をかけて開講を促す。断る人も多いが趣味を習得するのではなく楽しむことが目的であることを伝えている（表3(c)）。

2.5 組織の変遷

会員数と講座数、収益金額の変遷、独自のしくみの発生時期を示した組織の変遷を図4に、独自のしくみの概要を表4に示す。

まず発足から1~3年目には、組織活動における基本的な5つの約束の「じちこぶち」と「紹介制の入会」が作られ、価値観を共有した組織づくりが行われた。また、組織に関する情報共有と同時に個々の主体性を促す「スコアレ通信」や生活圏内での交流を行い、日常的な助け合いを促す「地域お助けマンくらぶ」のしくみが作られた。

4~14年目には健康的な老後生活を促す「がん検診」、講座の参加を助ける「車の乗合」が作られ、年に1度開催されるバザーの収益金額は30万円前後を保っている。また、会員数は年々増加傾向にあり12年目にピークを迎えるが、それ以降は減少傾向にある。講座数も

同様に年々増加傾向にあるが、11~16年目まで停滞する。

15~18年目には、講座の際に作りすぎた料理や農作物を売買して組織の資金とする「事前販売」を始めたことをきっかけに収益は増加傾向にあり、翌年以降は50万円前後を保っている。また、資金の増加に伴いメンバーへの還元と講座の参加や外出を促す「ポイントカード」が作られた。さらに、講座数も17年目以降は増加傾向にある。

19年目には、講座毎で「事前販売」実施の声かけを始めてから収益はさらに増加し、20年目以降は100万円前後を保っている。また、それに伴って「ポイントカード」の還元金額の上昇や「go to スコアレ講座共通券」が作られた。

以上より、1~3年目には組織活動における土台づくりが行われ、4~14年目には活動を持続させるしくみづくりを行いながらも会員数および講座数が停滞したが、15年目以降の収益金を生み出すしくみをきっかけに講座数と収益金が増加した。

2.6 小結

グループ・スコアレは老後の健康的な生活を理念として、楽しむこ

表2 調査の概要

目的	組織開設～運営の実態把握	自宅開放者と非開放者の実態、組織活動に対する評価把握
対象	①組織独自のメディア ②創設及び運営メンバー	全会員 81/208人 (回収率 38.9%)
方法	①文献調査：20周年誌 ⁷⁾ ②ヒアリング調査（理事長T）	アンケート調査 (配布・回収方法：郵送)
内容	(a)組織開設の経緯 (b)組織開設～運営時の意識 (c)自宅開放までの流れ	(1)組織活動 講座の参加理由、他者の来客頻度、活動の評価 (2)住宅 住環境整備の頻度、入会前後の変化、空き室利用、自宅の捉え方、入会後の自宅改修理由
日時	2021/9/24, 2022/5/6, 8/14	2022/8/3 - 9/9

表3 ヒアリング結果

(a)組織開設の経緯	【T】：学習塾の経験で教えることには情熱が必要だと思っていましたが、徐々に情熱が薄れてしまい、50歳で辞める段取りをとって3年間頑張ってから辞めました。それから3年間は、趣味の女性老人問題の講義行ったりしていました。しかし、何もすることがなくて自分探してみたいな、うつ病になりかけていた。その頃に、料理が好きだからYさんと他3人ぐらいいっぱい振舞って一緒に食べていたのですが、この形だと長く続かないので困っていたところ、これを組織にすればいいのではないかと話が出ました。私はびっくりしましたが、私の中でしたいことが頭にありましたので、すぐに作るようになりました。
(b)組織開設時と運営時の意識	【T】：お金儲けが絡むことは塾で嫌になりましたので、お金が絡まないボランティアがよかったのです。 【T】：昔の長屋暮らしというものがありますね。ちょっと立ち話してっていう間の時間もない。人間はコミュニケーションがないと面白くないと思っています。 【T】：私たちが気を使っているところは、本音が出せる場にしないといけないと思っています。いい格好をしない、どこかの家にもそんなことあるよというムードづくりをしないといけないと思っています。
(c)自宅開放までの流れ	【T】：入会時に書いてもらうアンケートを見つ、講座に参加されているところを観察して、出来そうだなと思う人にお話をします。初めは、皆さん謙虚なので「私には無理だ」と断られます。しかし、私たちは学び習得することが目的ではなく、楽しむことが目的なので大丈夫だと伝えます。

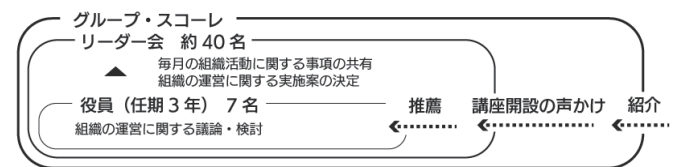


図2 運営体制



図3 講座中とお茶タイムの風景（筆者撮影）

とと平等な関係であること、共に助け合うことを大切にしている。また、それらの実現を目指して、発足時期から以下に示す(a)～(f)の目的を持った組織の体制やしきみが作られていた。そして、活動を継続

する中で(g)～(j)が作られた。特に、(h)～(j)のしくみが、講座数と収益金を増加させて組織活動を活発にさせている。

- (a)【民主的な組織体制】…「リーダー会」
- (b)【日常的な助け合い】…「地域お助けマンくらぶ」
- (c)【趣味を通じた交流】…「自宅開放」「お茶タイム」
- (d)【自宅開放における負担感の共有】…「1講座500円」、
「全員で準備・片付け」、
「複数講座で教え合い」
- (e)【自宅開放者の選出】…「理事長の声かけ」
- (f)【価値観を共有した組織づくり】…「じちこぶち」「紹介制の入会」
- (g)【活動参加の補助】…「車の乗合」
- (h)【資金の確保】…「事前販売」
- (i)【参加者に対する主体性の刺激】…「スコール通信」、
「事前販売実施の声かけ」
- (j)【互助活動の還元と活動の促進】…「ポイントカード」、
「go to スコール講座共通券」

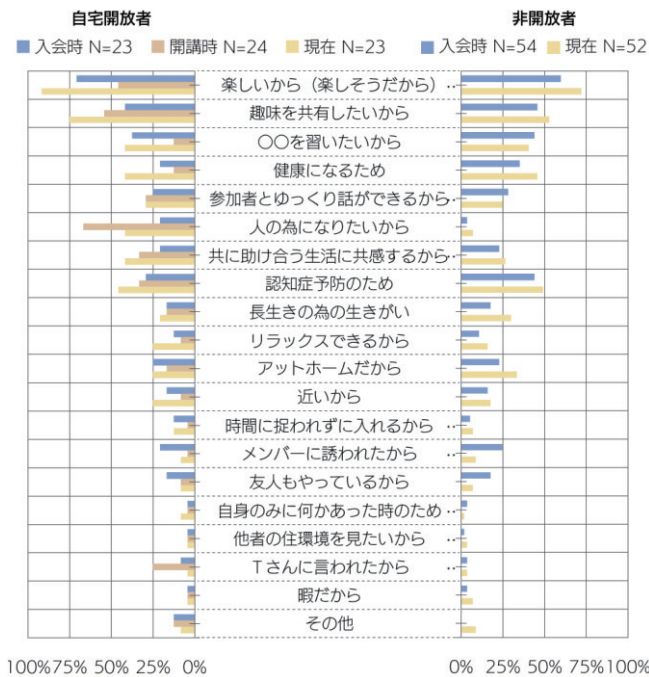


図4 講座の参加理由の変化

3. 自宅開放の有無からみる利用者の実態と組織活動の評価

3.1 講座の参加理由の変化

講座の参加理由を図5に示す。まず、入会前後において両者とも「楽しいから(楽しそうだから)」が最も多く、楽しさを求めて参加している人が大半である。また、開放者・非開放者とも「友人もやっ

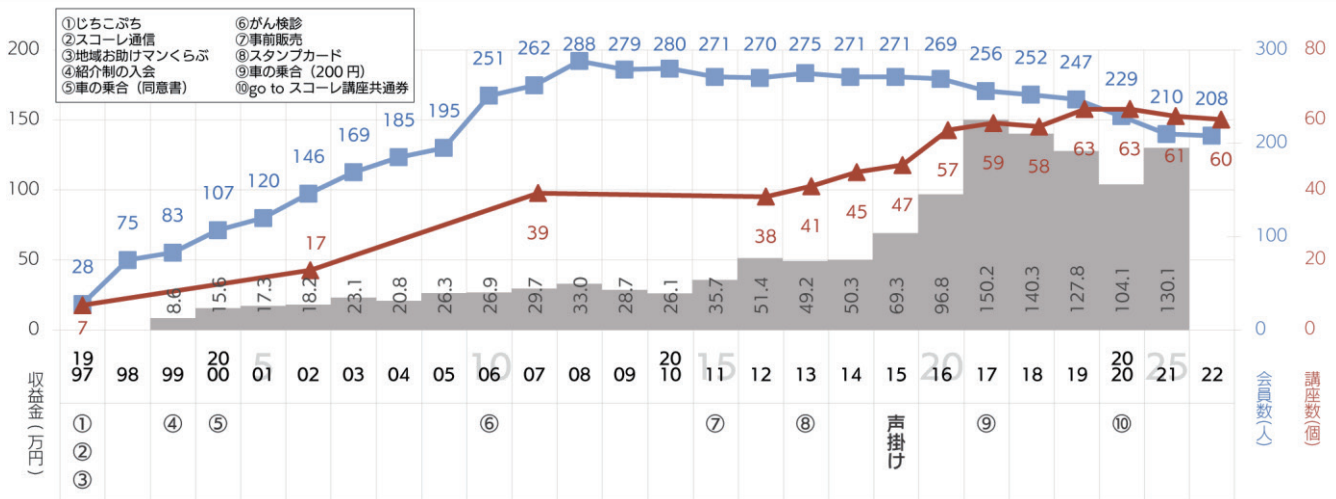


図5 組織の変遷(会員数と講座数、収益金額の変遷、独自のしくみの発生時期)

表4 組織独自のしくみ

No.	しくみ	内容	経緯・目的
①	じちこぶち	団体で示される5つの約束を簡略化した造語 ①時間が守れますか ②ちょっとおしゃれてみませんか ③心から笑いたいと思いませんか ④ちょっとプラス思考に考えてみませんか ⑤ちょっと人の為に役立ちたいと思いませんか	組織として必要最低限の基本的な統率をとるため
②	スコール通信	月に一度配布される独自の情報共有メディア 内容: ①組織活動の報告 ②収益・還元金の報告 ③組織活動協力のお願い ④行事の連絡 ⑤行事の感想 ⑥健康に関する注意管理	書いた人や見た人が主体性を抱くことを意図
③	地域お助けマンくらぶ	10地域に分割された地域ごとに連絡を取り合う 定期的に食事会やバザーなどの交流を図るイベントも行われる 講座とは異なり日常生活における細やかなフォローアップを促す	老後の生活を見据えて、生活圏内のコミュニケーション機会を生むため
④	紹介制の入会	メンバーの紹介がなければ入会できない	ボランティア的活動も承知の上で加入してほしかったため
⑤	車の乗合(同意書)	事故に備えて同意書を用意	駐車場の問題で車の台数を減らすため
⑥	がん検診	互いに声をかけ合うしくみで1回のがん検診の受診で2スタンプ	がんの早期発見、健康的な老後生活を送るため
⑦	事前販売	講座の前後で不要な物や作りすぎた料理・農作物を売買するしくみ 収益は組織の運営資金となる	バザーの出品量の減少と農作物を作りすぎて困っているメンバーの存在、メンバーの手間を省くため
⑧	スタンプカード	講座参加で1スタンプ付与、50スタンプで高島屋の金券に交換収益金の増加に伴い、21年目に500円から1000円にアップ	収益金の増加に伴ってメンバーへの還元と講座参加・外出を促すため
⑨	車の乗合(200円)	同意書に加えて片道200円の料金を設けた相乗りのしくみ 無免許者のみが対象	免許返納者の増加し、講座参加する際の移動補助を促すためと乗せてもらう側の心苦しさ解消のため
⑩	go to スコール講座共通券	1人4枚で2000円分の講座参加が無料でお年玉として各メンバーに配布	収益金の増加に伴ってメンバーへの還元と講座参加・外出を促すため

ているから」や「メンバーに誘われたから」の参加理由が入会前後で減少しており、講座参加を通じて主体性の向上がうかがえる。

一方で、「共に助け合う生活に共感するから」や「人のためにになりたいから」は、入会前後で両者とも増加する傾向にあるが、非開放者に比べて開放者は増加率が大きい。また、自宅開放者は講座開講時に「楽しいから（楽しそうだから）」だけではなく「人の為になりたいから」も多く、互助の意識は自宅開放との関係がみられる。

3.2 組織活動に対する評価

組織活動に対する評価を図6に示す。まず、「『車の乗合』によって共に助け合う意識が生まれている」「『スコア通信』は情報共有のしくみとして有効である」「『車の乗合』は移動補助の手段として有効である」「自由参加なので負担を感じにくい」「『ポイントカード』は外出を促すしくみとして有効である」が、開放者・非開放者で差がなく高い評価（3.6pt以上かつ±0.2pt^{注1)}）を得ており、講座活動と「車の乗合」「スコア通信」「ポイントカード」のしくみは立場に限らず評価されている。また、「支出に対する還元率が高く満足である」「他団体と比べて参加費が安価で好ましい」「紹介制によるメンバーの入会は安心できる」は両者とも項目の中で最も高い評価を得ており、組織づくりと安価な参加費、還元のしくみは円滑な組織運営に有効である。

一方、立場で異なるものとして「役員会やリーダー会は情報共有のしくみとして有効である」「『じちこぶち』は自治のルールとして有効である」「役員会やリーダー会は自由に発言できる場である」「独自のイベントやしくみに愛着がある」は自宅開放者が高い一方で非開放者は低い評価（3.8pt以上かつ±1.0pt以上）であり、組織活動の経験やしくみの理解度に差がある。さらに、「上下のない対等な関係性である」「『お茶タイム』は自由に発言できる場である」「はじめて参

加する講座でもリラックスできる」「知人友人を紹介しやすい雰囲気である」でも同様な差（0.8～0.9pt）があり、場の雰囲気の享受の仕方が異なる。

両者とも比較的评价の低いもの（共に3.6pt以下）としては「様々なイベントを積極的に企画できる雰囲気である」があり、民主的な組織体制が課題である。また、「自宅の開放が低頻度なので負担を感じにくい」も低く、自宅開放が負担であることは互いに理解している。

3.3 コミュニケーション頻度からみる自宅開放者の属性

入会前後、コロナ自粛期間中、現在におけるスコアメンバーとそれ以外の来客頻度を図7に示す。自宅開放者は非開放者に比べて若干頻度が高いことから、元々、比較的アクティブな人が自宅開放をしていると考えられる。また、自宅開放者における「現在」の来客が、「それ以外」ではコロナの影響で減少する一方、「スコアメンバー」ではほとんど変化しない。自宅開放によるコミュニティは、パンデミックのような非常事態においても交流を維持する強さを備える。

3.4 小結

まず参加者の大半は楽しさを求めて講座に参加しており、講座に参加することで主体性と互助意識を抱く傾向にある。これは、様々な組織のしくみの中でも、「紹介制の入会」が講座参加者に安心感をもたらし、自由参加の講座活動や安価な参加費と還元のしくみ、「車の乗合」「スコア通信」「ポイントカード」のしくみが講座の参加を促している。さらに、自宅開放による負担の大きさの理解が、講座参加者の主体性や互助意識を抱かせている。また、自宅開放はパンデミックの影響なくコミュニケーションと拠点性を維持させている。

一方で、平等な関係を生み出して共に助け合うためには、「じちこぶち」等の組織活動に対する理解度や「リーダー会」による経験値の違い、講座中の「お茶タイム」による場の雰囲気の感じ方の差を改善

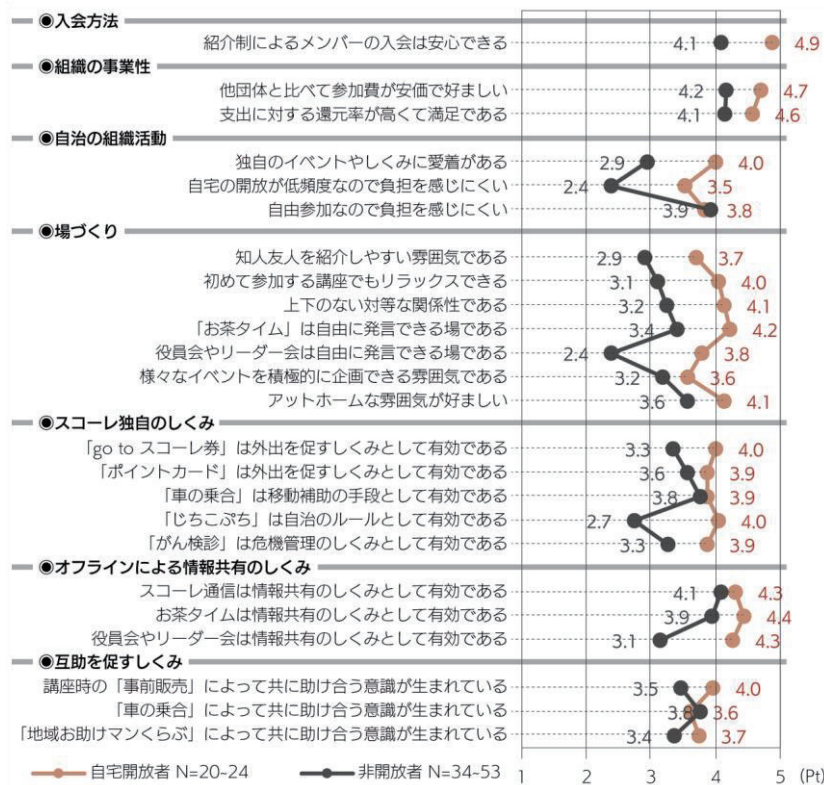


図6 組織活動の評価^{注1)}

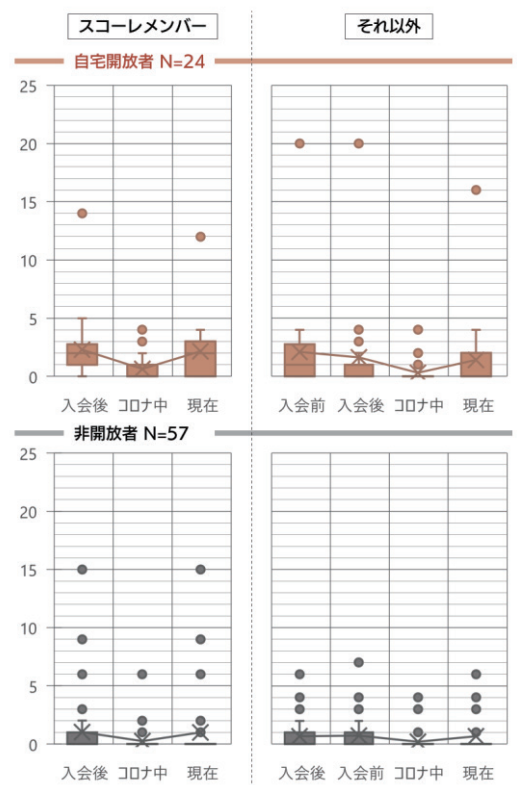


図7 対象者別の来客頻度の変化

することが必要である。

4. 住意識の変化

4.1 住環境整備の変化

自宅の手入れ（掃除や模様替え等）理由の変化を図8に示す。両者とも入会後に「他者の住環境に刺激を受けたから」が増加しており、住宅を開く活動が参加者に刺激を与え、自宅の手入れを促している。また、自宅開放者は入会後に「来客の頻度が高いから」が増加していた。さらに、図9の入会前後で変化したことの比較では「自宅の掃除や片付け、模様替えをする頻度が増えた」等に対して、自宅開放者のポイントの方が高い。以上より、自宅開放が他者の来客頻度を増加させることで自宅の手入れの機会を増加させている。

4.2 空き室活用の効果

空き室の利用方法の変化を図10に示す。まず、組織活動参加の効果としては入会前後において両者ともに「使用していた時のまま放置」が減少し、「趣味の場」が増加していることから、趣味を通じた空き室活用の動きが生まれていることがわかる。一方で、自宅開放者は入会後に「趣味の場」が大幅に増加しており、自宅開放をきっかけに趣味を通じた空き室の活用が促進している。また、両者とも日常の生活空間の一部である「居間」や「寝室」がわずかに増加していることから、住宅を開く活動によって自宅の柔軟な使い方が展開されている可能性もみられた。

4.3 住空間の捉え方の変化

自宅の捉え方の変化を図11に示す。まず入会前後の変化として、両者とも「趣味の場」や「交流の場」「おもてなしの場」が増加しており、住空間の捉え方が変化している。さらに、「終の棲家」の増加も見られ、組織活動を通して住宅への愛着や住まい続けることの意欲が生まれていることがわかった。しかし、自宅開放者の方が比較的、入会前後で増加量が大きく、空き室活用と同様に自宅の開放が住空間の捉え方の変化を起しやすいくことも確認できた。

4.4 自宅の改修理由

入会後に自宅改修した人の改修理由を図12に示す。まず、「設備や内装材、外装材等が劣化したから」「きれいにしたいから」「自分好みの家（部屋）にしたいから」「生活上、不便だから」「居住人数が変化したから」では、両者とも同様の結果となり、経年劣化や身体及び家庭環境の変化が影響で自宅改修を行っている。一方で、自宅開放者のみ「来客の頻度が高まったから」「他者の住環境に刺激を受けたから」による理由が確認できた。つまり、少数ではあるが、自宅の開放が改修のきっかけの一つになっている。

4.5 小結

趣味を通じて住宅を開く活動は他者の住環境に触れ、参加者に刺激を与えることで①住環境の整備、②空きストック活用、③住空間に対する意識の変化を促している。また、自宅開放者は住宅を開き合う活動が互いに刺激を与え合うことで①～③のさらなる促進と共に④自宅改修にもつながっている。

5. 結論

本研究は自治組織として住宅を開き合う活動を行うグループ・スコアを対象に開設から運営の実態と利用実態、さらに活動が及ぼす住意識の変化を明らかにした。以下では、当組織活動のメカニズム

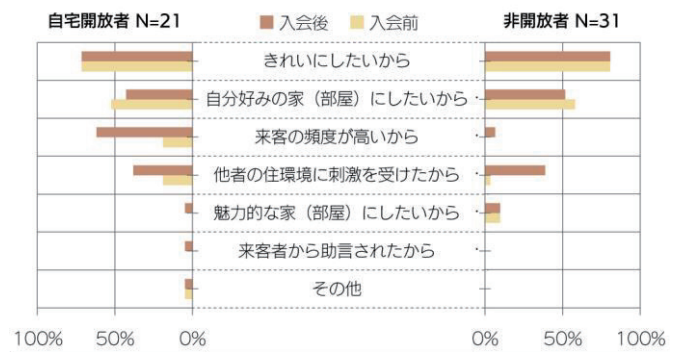


図8 住環境整備における理由の変化

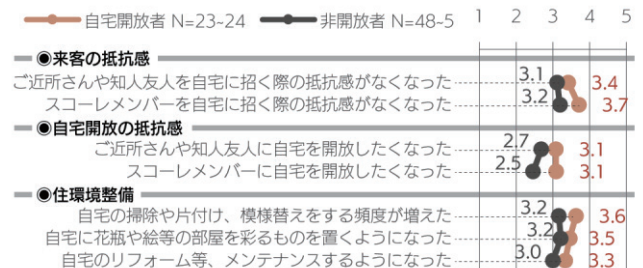


図9 抵抗感と住環境整備の変化 注1)

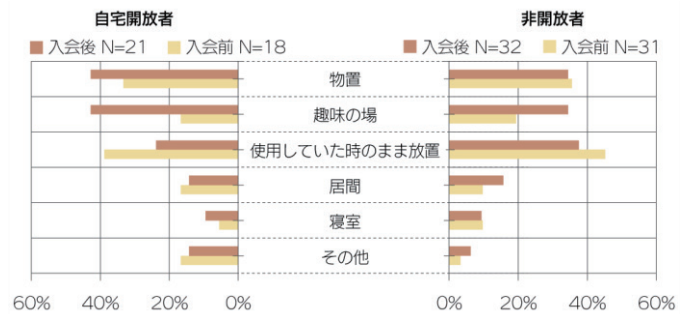


図10 空き室利用の変化

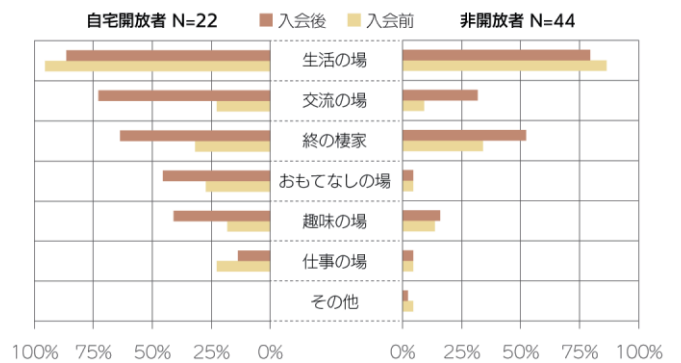


図11 自宅の捉え方の変化

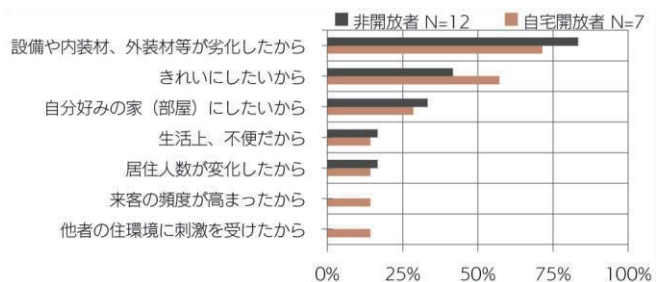


図12 自宅の改修理由

を踏まえて、自治組織の運営における要点と自治組織として住宅を開き合う活動の効果と可能性を考察する。

5.1 自治組織の運営における要点

グループ・スコアの組織運営と利用実態の関係を図 13 に示す。自治組織を運営するにあたって、共に助け合うこと、楽しむこと、平等な関係性の3つの価値観の共有を目指して、組織体制を築き、様々なしくみを生み出すことが重要である。そして、組織体制やしきみづくりの際には、活動に参加して交流する中で自然と刺激を感じるよう、巧妙につくることが求められる。中でも、発足以降の早い段階では図 13 に示す(a)～(f)を進めることで前向きな活動の参加を促しながら価値観を共有した活動基盤の形成が可能となる。活動の参加を促すために(g)も重要である。さらに、共有する価値観の意識を高めるためには、(h)を進めながら(i)を行い、楽しみを求めている参加者の活動を活発にさせる。それと同時に(j)を引き起して収益金の増加と共に還元量を増加させ、さらなる活動の展開を生む必要がある。

5.2 自治組織として住宅を開き合う活動の効果と可能性

住宅を開く活動は、他者の住環境に触れることが刺激になり、参加者の住環境整備や空き室の有効利用の機会を生み出し、自宅への愛着や住まい続ける意欲が湧く。さらに、自宅開放者はそれらの促進と自宅改修の機会をつくる。このような自宅の維持管理や住みこなし、住み手意識の変化は、高齢期においても持続的で自律的な住環境形成を実現する。このことは、質を維持したままでの次世代への住まいの継承を可能にし、空き家問題の緩和を促す一手法としても評価できる。また、非開放者と比べて自宅開放者には主体性と互助意識がより強いことから、自治組織として(i)を行い、(c)や(h)等の自宅開放を支える体制やしきみを構築して開放者を増やすことで、組織活動だけでなく個人生活の充実を実現させると考える。

謝辞

研究にご協力いただいたグループ・スコアの皆様に記して謝意

を表します。本研究は、「科学研究費若手研究：活用困難空き家の発生・拡大を防止する計画技術の開発（課題番号：20K14921）」の研究成果の一部である。

注

注 1) アンケートの項目に対する5段階評価（「5. 非常にそう思う」「4. 少しそう思う」「3. どちらでもない」「2. あまりそう思わない」「1. 全く思わない」）の平均値。

参考文献

- 1) アサダワタル：住み開き もう一つのコミュニティづくり 増補版，ちくま文庫，2020年3月10日
- 2) 一般財団法人世田谷トラストまちづくり HP, 地域共生の家づくり支援事業, <https://onl.la/xJfLexT> (閲覧 2022/09/10)
- 3) Chikako SUZUKI：SUPPORT SYSTEM TO FORM ‘CHIIKI-KYOSEI-NO-IE’ BY SETAGAYA TRUST MACHIZUKURI FOUNDATION A study on formation the place for community using private space by owner suggestion, J. Archit. Plann., AIJ, Vol. 75 No. 650, 873-882, Apr., 2010
鈴木智香子：財団法人世田谷トラストまちづくりにおける「地域共生のいえづくり支援事業」制度の運用実態－所有者発意による私有空間を活用した地域公共施設の整備に関する研究－，日本建築学会計画系論文集 第75巻 第650号，873-882，2010年4月
- 4) 杉田早苗，土井良浩：地域組織による公共空間の管理運営に関する基礎的研究－世田谷まちづくりファンド助成事業における市民活動を対象として－，公益社団法人日本都市計画学会 都市計画論文集 Vol.47 No.3, 469-474, 2012年10月
- 5) 有可武郎，宮崎均：地域公共施設の空間特性とまち・地域での居場所性に関する研究－財団法人世田谷トラストまちづくりにおける「地域共生の家づくり支援事業」を事例として－，日本建築学会大会学術講演梗概集，589-590，2019年9月
- 6) 米山美貴，江口亨：地域に開かれた私有空間の継続的な運営に関する研究－世田谷区「地域共生のいえ」を対象として－，日本建築学会大会学術講演梗概集（中国），351-352，2017年8月
- 7) グループ・スコア：20周年記念誌「スコアの歩み」，2017年12月

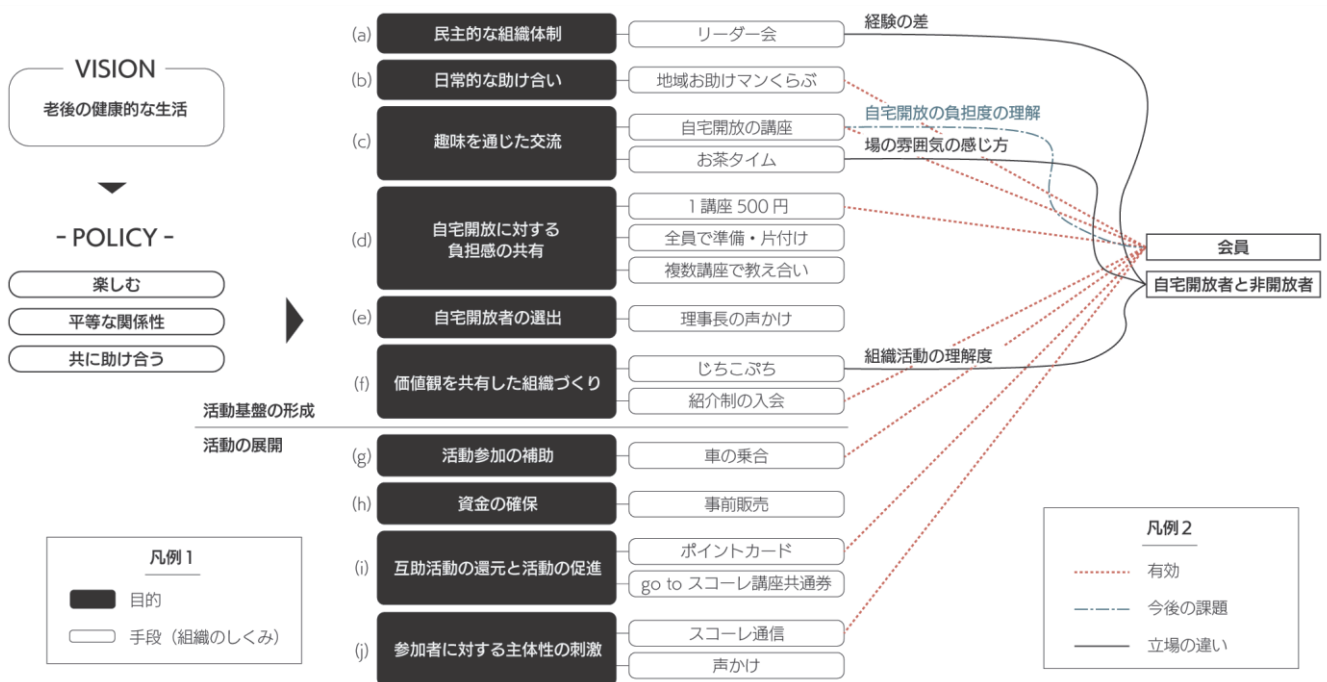


図 13 グループ・スコアの組織運営と利用実態の関係

[2022年10月5日原稿受理 2022年12月21日採用決定]